『大阿弥陀経』における「智慧」について

肖 越

問題の所在 智慧という思想は、六波羅蜜において、最も重要な要素で、『大阿弥陀経』（以下『大阿』）において、43 回ほど見られる。本論では、『大阿』における「智慧」の用語に関連する文の成立意図を手掛かりとし、新たな側面から『大阿』の成立を巡って検討してみる。

1. 法蔵説話段における「智慧」 『大阿』の特異な法蔵説話段は原始浄土思想の最も古い形ではなく、漢訳者によって修訂された内容であると筆者は指摘した¹⁾。文献学的な証明ができるかどうかは、問題の焦点となる。難解なる法蔵説話段の成立は、『大阿』において重要な位置を占めているので、その成立を十分に理解できなければ、『大阿』の成立の全体像、乃至〈無量寿経〉諸本の成立の問題を明らかにできない。この段落において、「智慧」「修菩薩道」「寿四十二劫」「二十四願」という表現が頻繁に見られるので、編集者の意図を解明する手がかりとなると考えている。内容に従って4段に分けて検討してみよう。

1. 1. 「寿四十二劫」「作菩薩道」「智慧勇猛」 第一段は、「仏告阿難」より「却長跪叉手，白仏言」までとなる（T12, p.300c18-23）。諸本の対照から²⁾、『平等覚経』（以下『平等』）で対応する文は、『大阿』のものを踏襲しながら、意図的に意識語で改訳した。例えば、『平等』の訳者は、「王」を「世饒王」と誤解したので、「世饒王」を「王」に修正すべきである。また、『平等』には、漢訳者が意図的に改訂したところもある。従って、以上の『平等』にある文は、必ずしも忠実に原本から翻訳されたものであるとはいえないことが確実にいえる。

「寿四十二劫」に関する文にも、この特徴が当てはまる。『大阿』『平等』『無量寿経』、梵本、及び百済写本とも、同じ「寿四十二劫」である。しかし、「初期無量寿経」以外の諸本では、その仏の寿命に関する記述は共通で、歎仏偈の後にある。ではなぜ、『平等』にのみ歎仏偈がありながら、「寿四十二劫」の文は、法蔵説話段の前部に移り変わったか。『平等』の歎仏偈は、現存の梵本のものとほぼ一致するので、『平等』の原本における法蔵説話段は、現存の梵本のものとよく

一致することがわかる。従って、歎仏偈の次にあるべき「寿四十二劫」という表現を法蔵説話段の前部に移し変えた原因は、『平等』の翻訳者が、歎仏偈を翻訳した際に、『大阿』の「寿四十二劫」に関連する文を踏襲したからである。それによれば、『大阿』の寿命に関する文は、必ずしも原本の位置と一致するのではなく、翻訳者の修訂によって、現在の位置になったことが十分に考えられる。次に、『大阿』の他の文から翻訳者の意図を汲んでみる。

『大阿』の以上の文において、「修菩薩道」という表現は重要な表現である。同じ表現は、次の129字と第7願にも見られる。それらすべては、梵本に対応する箇所が存在しない。『平等』の対応文では、「発菩薩意」に修訂した。『平等』の歎仏偈の次の「発意欲求無上正真道最正覚」(T12, p.280c15)は、梵語 *anuttarāyām samyak sambodhau cittam utpādayāmi*³⁾ と一致する。従って、『平等』の「発菩薩意」は、歎仏偈後の「発意欲求無上正真道最正覚」の主旨に基づき書き換えられたものであるとわかる。『平等』においても同じような用例がもう一箇所ある。東方偈に「以是故発道意」という用例がある (T12, p.288c29)。

六度菩薩行において、最も重要な要素としての「智慧」という用語は、『大阿』において43回ほど数えられる。そのうち、「智慧勇猛」という形で17回ほど使われている。しかも、ほとんどの用例では梵本に対応する箇所が、存在しないことを無視してはいけない。次に、他の特徴を参考にしながら、『大阿』において、「智慧」思想が重視されている意図を汲んでみる。

1.2. 129字の主旨 第二段落は、複数の誓願文に対応する『大阿』のみに存在する129字である。すでに指摘したように、『大阿』の誓願文と成就文との対応のほか、幾つかの誓願文は、誓願文前の法蔵説話段の129字に対応する。いわゆる二重対応の関係を持っている⁴⁾。筆者は、『大阿』の翻訳者が、重要な誓願文と思ったものを以上の129字に纏めたものであると指摘した⁵⁾。この129字の主旨は、法蔵が、菩薩行を修行し、阿弥陀仏となり、自ら優れる智慧主となり、その国土には「菩薩・阿羅漢無数」がいることを願っている。この129字が、最も原初的形態であるのではなく、漢訳者が修訂したものであれば、必ず『大阿』の他の文を通じて翻訳者のこの意図が見られると、筆者は考えている。

1.3. 大海の喩 第三段は、二つの内容からなる (T12, p.301a4-10)。前半は、「譬如天下大海水…心中所欲願爾」という菩薩行を勧める比喻である。この文は、『大阿』と『平等』と『無量寿經』だけに存在する。しかも、『大阿』『平等』の二本には、以上のほかに、仏の智慧を表す類似の表現がある (例えば T12, p.309a27-29)。

(56) 『大阿弥陀経』における「智慧」について (肖)

この物語は、『平等』に見られるが、それは原本にあったものを翻訳した文ではなく、ただ『大阿』のものを踏襲したのではないかと考えている。根拠としては、ア)『大阿』の文を踏襲する実例は、『平等』の随処に見られる。イ)この物語は、以上の『大阿』の「為菩薩行」の内容と一致する。『平等』には、『大阿』の129字が存在しない。ウ)『大阿』の第7願に対応する『平等』の第18願に「為菩薩道」の表現があるが、『大阿』の第7願の「作菩薩道」の後の「奉行六波羅蜜経…」の解釈文が、『平等』で削除された。エ)『大阿』第7願の「我即与諸菩薩阿羅漢、共飛行迎之」を、『平等』の第18願では、「我与不可計比丘衆飛行迎之」に改訳した。従って、『大阿』の翻訳者は、「作菩薩道」「智慧」を強調するために、この物語を作って、『平等』の翻訳者がそれを踏襲したのである。

以上の比喩の次の文の位置に注意すべきである。「後期無量寿経」諸本の対応文は、仏の寿命に関する内容の次（歎仏偈の後、誓願文の直前）になる。『平等』では、「寿四十二劫」の文を「歎仏偈」の前に移し変えたのに、この文の位置は後期經典のものと同じように歎仏偈の後になる。このように、意味が完全に対応しているのに、場所だけ大きくずれるということは、意図的に修訂した記述であると考えられる。従って、『大阿』の原本にあった法蔵説話段は、現存の梵本のものとはほぼ一致することが十分に考えられる。

1.4. 「二十四願」の表現について 第四段は、第三段の次から誓願文の直前となる (T12, p.301a7-24)。『大阿』では、「二十四願」という表現が7回使用されている。この7回の用例は、すべて法蔵の菩薩行に関わりがある。それでは、「二十四願」という表現は、『大阿』において、特定の意味があるのだろうか。誓願文の直後の文に、「阿弥陀為菩薩時、常奉行是二十四願。分檀布施、不犯道禁、忍辱、精進、一心、智慧」(T12, p.302b15-17)とあり、六波羅蜜を列挙している。また、『大阿』には、阿闍世王太子及びその五百の長者たちが、阿弥陀仏が二十四願（作菩薩道）を求め続けることを聞いて、我々が成仏する時に、阿弥陀仏のように（常に二十四願という菩薩行を）修行することを発願したという文 (T12, p.303b2-8)がある。これらの文から、『大阿』における「二十四願」という表現は、たゆみなく菩薩道を求めるという特定の意味を持つことがわかる。この段について、藤田氏は「少なくともこの一節が「初期無量寿経」の原本にあったと見ることは困難であろう。」と指摘している⁶⁾。

以上の分析により、『大阿』の法蔵説話段における法蔵の菩薩行を強調する内容は、原典から忠実に翻訳したものではなく、漢訳者が意図的に修訂した内容で

ある。その趣旨は、「作菩薩道」を強調することで、「智慧勇猛」も「菩薩阿羅漢無数」も、「作菩薩道」の目的である。翻訳者のこの主旨は、同書の随処に見られる。次に、誓願文における「智慧」を見よう。

2. 「誓願文」における「智慧」 『大阿』の誓願文において、「智慧」の用語は、第7願、第18願、第22-23願に使用されている。ここで最も重要な第7願のみを分析してみる。『大阿』の第7願は、『平等』の第18願、『無量寿經』と『如来会』の第19願と梵本の第18願に対応する。まず、『大阿』の第7願は120字で、最も長い誓願文で、少なくとも他の誓願文の倍となる。内容において、成立年次が大きく隔たっていない『平等』の第18願や、『無量寿經』と『如来会』の第19願と梵本の第18願とが類似していることをよく吟味すべきである。次に、他の諸本の対応を分析してみれば、『大阿』の第7願には、増広した内容がある。それは、「有作菩薩道，奉行六波羅蜜經…若作沙門，不毀經戒，斷愛欲，齋戒清淨…諸菩薩，阿羅漢…智慧勇猛」である。それらの内容すべて「作菩薩道」と関わりがある上に、後の「五惡段」にも頻繁に使用されている。以上の文を削除し、また「作菩薩道」を「發菩提心」に直せば、第7願の内容は、現存の梵本の第18願とほぼ同じ内容となることがわかる。従って、以上の下線の文句は、『大阿』の原典にあった特徴というより、むしろ翻訳者自身の初期大乘思想の反映で、則ちそれらの表現は、漢訳者が作菩薩道を強調したものであると考えている。以上増広した文から、以下の諸点を読み取れる。(ア)「作菩薩道」の表現は、後期經典では、「發菩提心」となり、梵語の *anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau cittam utpādyā* に対応する。また、六波羅蜜の要素を取り上げる用例は、『大阿』にもう一箇所 (T12, p.315c14-18) ある。この文は、五濁惡世で一日の菩薩行を勤めれば、極樂での百年の菩薩行より優れることを説いている。(イ)「六波羅蜜經」とは、具体的な經典ではなく、六波羅蜜法の意味である⁷⁾。(ウ)「齋戒清淨」について、第7願は出家者のための誓願なので、八齋戒の意味ではなく、愛欲を断じるという特定の意味を持っている。(エ)「智慧勇猛」は、六波羅蜜で最も重要な要素で、「作菩薩道」の最終の目的として強調されている。

3. 『大阿』における「愚痴」 反対語「愚痴」を通じて「智慧」の重要性を強調するのは、『大阿』の特徴の一つである。この用語は12回使用されている。それらの用例について、梵本に対応する箇所は存在しない。「常修梵行」願に基づき増広したと見なしうる第11願は、その一例である⁸⁾。そのなか、「無有淫佚之心」「終無念婦女意」は、第7願の「斷愛欲，齋戒清淨」と対応し、三毒の貪

(58) 『大阿弥陀經』における「智慧」について (肖)

欲を断じるという意味で、仏教において梵行という。「瞋怒」「愚癡」は、「智慧」の反対語で、三毒の「瞋」「痴」という意味である。また、第11願は、用語、文法、思想という三つの面から「五悪段」に対応しているので、『大阿』の11願が原本から忠実に翻訳されたものだとは考えられない。『大阿』において、このような用例は、10回以上見られるので、偶然である可能性はなく、漢訳者が、意図的に異なる側面から、「智慧」の重要性を強調しているのである。

結論 まず、『大阿』における法蔵説話段は、「作菩薩道」「智慧勇猛」を中心に法蔵の菩薩行を説くもので、『大阿』の原本にあった形態ではなく、漢訳者により意図的に修訂されたものである。修訂した主旨は、菩薩行の重要性を強調することである。『平等』の法蔵説話段は、現存の梵本と一致していること、また、『大阿』の相違文には、漢訳者の主旨を反映した跡が著しく見られることから、『大阿』の原典にあった法蔵説話段は、現存梵本のものに類似する可能性が高いと考えている。従って、『大阿』の成立の問題を研究する際には、成立年次が大きく隔たっていない『平等』は非常に重要な資料であり、無視してはならない。次に、『大阿』において、「智慧」を重視することにより、法蔵の無上智慧から、極楽へ往生した菩薩阿羅漢が無上智慧を得ることへと展開した。智慧を重視する趣旨は、五悪段にも見られる。従って、この特徴は、初期大乘仏教の特徴というより、むしろ漢訳者自身が有していた大乘思想によるものである。これは、『大阿』の主旨でもある。『大阿』における、「作菩薩道」の思想は、部分的な変容ではなく、『大阿』の「五悪段」を含む、同書の随処に、翻訳者のこの思想が見られる。本論の詳細は、別稿に譲る。

-
- 1) 肖越『『大阿弥陀經』における特異な「法蔵菩薩説段」』（『佛教大学仏教学会紀要』第17号, 2012). 2) 大田利生『漢訳五本梵本蔵訳対照無量寿經』（永田文昌堂, 2005), pp.24-25. 3) 藤田宏達『梵文無量寿經梵文阿弥陀經』（法蔵館, 2011), p.12. 4) Xiao, Yue “Women in the Pure Land: The *Karunā puṇḍarīka* and the *Da amituo jing* 大阿彌陀經,” *Journal of Institute of Buddhist Culture Musashino University* 30 (2014): pp. 59-62. 5) 肖越同前稿, pp.86-92. 6) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』（岩波書店, 1970), p.173. 7) 静谷正雄『初期大乘仏教の成立過程』（百華苑, 1974), p.57. 8) Xiao, Yue 同前稿, pp.77-85.

〈キーワード〉 智慧, 六波羅蜜, 作菩薩道, 『大阿弥陀經』, 『平等覺經』

(佛教大学総合研究所特別研究員)